

加賀立国1200年記念

KAGAKOKUFU

加賀国府BOOK



ようこそ
加賀国府ロマンの
世界へ



戸津窯跡出土陶製水煙（小松市指定文化財）



加賀立国1200年記念
加賀国府BOOK

発行：小松市埋蔵文化財センター

2026年8月 第2版発行

まずは基本をおさらい

そもそも国府ってなんだろう？

国府は
令制に基づく
地方行政府

現在の法律にあたる「律」と「令」に基づいて国を治める仕組みを「律令制」と言います。律は刑法、令は行政法などに相当します。日本では天皇中心の中央集権国家の確立に向け、唐の制度を参考に7世紀から律令制の整備が進められ、飛鳥時代の701年、「大宝律令」の制定をもって確立しました。

この令制に基づき国郡里制が敷かれ、中央直轄の地方行政府として諸国に置かれたのが国府です。政務儀礼を行う国庁を中心に行政事務

を行う役所群などの施設が置かれました。行財政、司法、警察などの政務を司り、行政官として国司らが中央から派遣されました。

大宝律令の制定当時、石川県域は越前国に属し、江沼・加賀・羽咋・能登・鳳至・珠洲の6郡がありました。718年に羽咋・能登・鳳至・珠洲の4郡を分けて、能登国が分国されました。823年には江沼・加賀の2郡を分けて、加賀国が成立しました。以降、新たな国は設けられず、加賀国は最後の立国となりました。

4つのキーワード

律令制

唐の制度を参考に701年に制定された大宝律令では、国が保有する農地の耕作権を人民に貸与する班田収授制、租税制度の租・庸・調、地方行政の枠組みである国郡里制、役人に関する官僚制、民に兵役を課す軍団制などが定められ、人民と土地を把握する強力な中央集権の体制がつけられました。

しかし、奈良時代後半頃から少しずつ有名無実化していき、平安時代中頃の10世紀末には実質的に崩壊したと言われています。

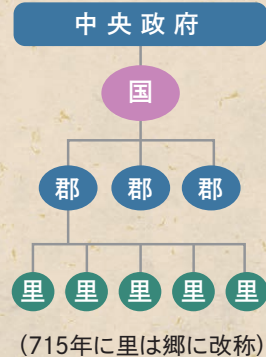
租・庸・調

租：人民に貸与された田の収穫の3%程度の稲(米)を徴収
庸：労役の代用として布または米を徴収
調：布や地方の特産品を徴収



国郡里制

大宝律令で定められた地方行政区画の体系が国郡里制です。全国を国・郡・里の3段階の行政区画に編成し、国には中央から国司らを派遣して統治しました。郡は在地の有力豪族を郡司に、里は50戸で編成され、その有力者を里長に任じ地方支配をはかりました。



国府を知るための



七道五畿

律令制で定められた地方行政区画です。特別行政区の五畿は山城・大和・河内・和泉・摂津、その他の七道は東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道を指します。七道の国府は駅路で結ばれ、原則30里(約16km)ごとに駅家を置き、国の伝令が使う馬が常備されました。

加賀国は北陸道に属し北から深見・田上・比叡・安宅・潮津・朝倉の駅が置かれました。

五畿

山城・大和
河内・和泉
摂津

七道

東海道・東山道
北陸道・山陰道
山陽道・南海道
西海道

国府と国司

地方行政の国府は、その所在地を指す言葉でもありました。中央から派遣される国司は守・介・掾・目の四等官で編成され、その長官が国守です。そのほか、書記官の史生、四等官の代理となる専門職の国博士・国医師・国師も派遣されていました。国司の任期は当初6年でしたが、のちに4年になりました。

国府に中央から派遣された役人

国司(守)
国司(介)
国司(掾)
国司(目)
史生
国博士
国医師
国師

国司のトップが国守

小松の主な出来事と「加賀立国1200年」

西暦	年号	現小松市域の出来事
前20000		小松に石の道具を使う人々が住みはじめる
前3000		梯川河岸段丘や柴山潟周辺台地に縄文の集落が増加する
前300		低湿地で稲作が始まり拠点となる弥生の集落が誕生する
300		丘陵に大きな古墳がつくられる
500		南部丘陵で須恵器生産がはじまる
600		渡来人のムラがつくられ鉄の生産がはじまる
680		この頃、越前国が誕生する
710	和銅 3	奈良に平城宮がつくられる
794	延暦 13	京へ官都が移り、平安京ができる
821	弘仁 12	紀末成が越前国守となる
823	弘仁 14	越前国から江沼郡と加賀郡が分かれ加賀国が誕生する。同年2郡から4郡に分かれる
825	天長 2	加賀国が中国から上国に昇格する
839	承和 6	源寛が加賀国初の特任国司になる
841	承和 8	勝興寺を転用し加賀国分寺を置く
883	元慶 7	菅原道真が加賀国の権守となる
1152	仁平 2	白山宮が延暦寺の末寺となる
1175	安元 元	藤原師高が加賀国守となり弟の師経が目代として国府へ
1176	安元 2	師経が白山宮と争い湧泉寺を焼く(安元事件)
1183	寿永 2	林光朝が源義仲軍に加わり越前国に攻め込み敗れる 実盛の奮闘・戦死と多太神社への兜など寄進される(伝承)
1187	文治 3	源義経主従が頼朝に追われ、奥州へ逃れる
1474	文明 6	一向一揆起こる(文明の一揆)
1488	長享 2	長享の一揆で富樫政親が滅び加賀国が「百姓の持ちたる国」になる
1600	慶長 5	浅井礒の戦い(前田氏と丹羽氏の戦い) 前田家が加賀・能登・越中の領主となる
1640	寛永 17	前田利常、小松城に入城する
1689	元禄 2	松尾芭蕉、奥の細道の旅路で小松を訪れ4句詠む
1872	明治 5	小松城が取り壊しとなる
1940	昭和 15	小松市が誕生する(12月1日)
2023	令和 5	加賀立国1200年祭
2024	令和 6	北陸新幹線小松駅開業

やり手の 越前国守

紀末成の 加賀立国 大作戦

弘仁12年(821)に越前国守となつた紀末成にとつて、7郡もある広大な越前国を治めるのは相当に大変でした。国府が国の南方、今の越前市に置かれていたので、遠方の加賀郡まではなかなか巡回できず、地元の有力豪族がわが物顔でござつていたのです。

中でも加賀郡司だつた道君という豪族は、国府の目が行き届かないのに乗じて、国の決まりや指示に従わず、意のままに民から収奪し、私腹を肥やしていました。そこで末成は4つの理由を挙げて、越前国7郡のうち江沼と加賀を独立させ「加賀国」を立国したいと、朝廷に願ひ出たのです。末成

の真の狙いは、道君や江沼郡司の江沼臣の権力をそぐことにあつたようです。

こうして末成の加賀立国大作戦は功を奏し、弘仁14年(823)、加賀国が誕生したのです。

諸国の国守を歴任

大納言・紀古佐美の9男。幼いころから賢くて、20歳で式部丞という役職に抜擢されました。その後、伊豆守、常陸守、大和守、越前守などの地方官を歴任し、加賀立国後は加賀守も兼任するなど、そつなく大役をこなした優秀な官僚でした。



立国作戦
大成功!

能美・石川郡も独立

越前守と加賀守を兼任することになった末成は、加賀立国直後に江沼郡から能美郡を、加賀郡から石川郡を独立させ、加賀国は4郡になりました。この分郡策にも、地方豪族の力をそぎ、中央政府の統治を強化する狙いがうかがえます。実際、道君と江沼臣は弱体化し、道君は次第に没落していきました。

晴れて「上国」に昇格

当時の諸国は大国・上国・中国・下国にランク付けされていました。立国時は中国だった加賀国は、末成の巧みな根回しにより、2年後の天長2年(825)、晴れて上国に昇格しました。

こうして加賀立国を成功に導いた末成でしたが、矢継ぎ早の改革で疲れ果てたのか、同年12月に亡くなってしまいました。加賀立国は末成にとって最後の大仕事になったのです。

2

間に大きな川が4つあり、洪水の度に交通が途絶える

1

越前国府から遠くて行き来が不便

加賀立国を
願ひ出た
4つのワケ

加賀立国で
一気に解決!



4

国が広くて回りきれないため、官舎や農地が荒れる

3

豪族が悪行を繰り返しても、遠くて民が訴えられない

本当のねらいは
私腹を肥やす豪族の
弱体化にあった

歴史書「日本紀略」に加賀立国と能美郡の分郡が記されている

■立国記事

弘仁十四年(八二二)三月

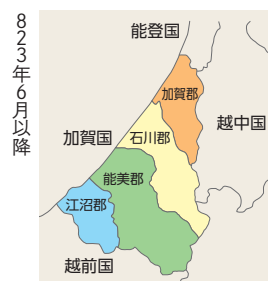
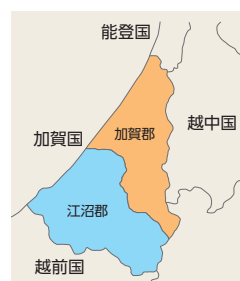
割越前国江沼・加賀二郡、為加賀国、以部内闕遠、民人愁苦也、

■分郡記事

弘仁十四年(八二二)六月

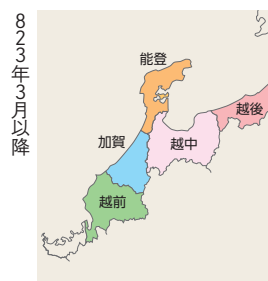
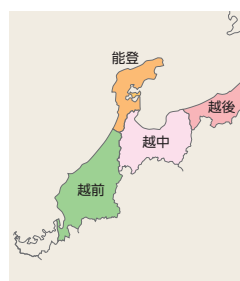
越前国言上、丹生郡管郷十八、駅三、割九郷一駅、更建一郡、号今立郡、加賀国江沼郡管郷十三、駅四、割五郷二駅、更建一郡、号能美郡、加賀郡管郷十六、駅四、割八郷一駅、更建一郡、号石川郡、以地広人多也、

能美・石川分郡の前後



※郡境は近世の境界で示す

加賀立国の前後



823年3月以降

823年6月以降

加賀の国守は どんな人

平安時代の 国司の実像

「学問の神様」も
加賀国守だった！

加賀国守を務めた著名人

- 藤原良房：藤原家初の摂政
- 菅原道真：文学博士、学問の神様
- 藤原家成：鳥羽院政を支えた側近
- 藤原俊成：歌人、「千載和歌集」の選者



「菅原道真公像」(部分)
(東京都八王子市観光課提供)

国府を現在の県庁だとすれば、中央政府によって任官される国守(国司)長官は官選知事ということになります。加賀国にも初代国守・紀末成を皮切りに入れ代わり立ち代わり新たな国守が就きました。歴代加賀国守には歴史に名を刻んだ大物が含まれています。

「赴任せず」が
当たり前

国府を現在の県庁だとすれば、中央政府によって任官される国守(国司)長官は官選知事ということになります。加賀国にも初代国守・紀末成を皮切りに入れ代わり立ち代わり新たな国守が就きました。歴代加賀国守には歴史に名を刻んだ大物が含まれています。

歌壇第一人者の
藤原俊成も

実は、道真のように国守が任国に赴任しない「遥任」が徐々に増え、平安中期にはそれが当たり前になりました。実際に赴任した国司のトップは「受領」と呼ばれ、不在の国守に代わって任地で強大な権力を握るようになっていきました。

平安後期の寛治4年(1090)に加賀守に就いた藤原為房は、白河天皇や鳥羽天皇らに仕えた優秀な実務官僚でした。当時としては珍しく、短期間ですが加賀国に下向し、日記「為房卿記」にその折の行動が克明に記されています。

天長7年(830)に加賀守となつた藤原良房は、のちに皇族以外の

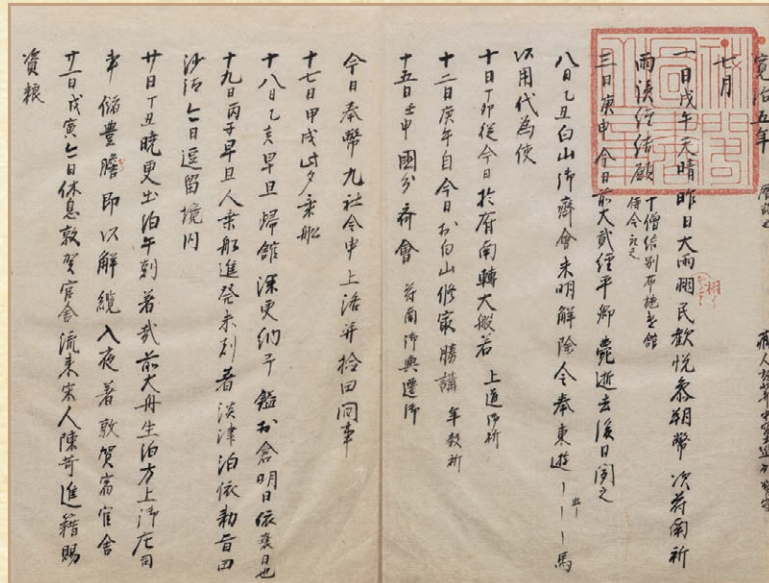
人臣で初めて摂政に就くなど、藤原家隆盛の礎を築きました。

大治2年(1127)に加賀守に就いた藤原家成は鳥羽天皇第一の側近で、平清盛とも親交が深かったことで知られています。

東奔西走した加賀国守・藤原為房 日記が示す国守のお仕事

加賀国守・藤原為房が加賀国に下向したのは寛治5年(1091)6月。7月1日、府南社(惣社)で朔幣(一日参り)と雨乞いの読経を行い、8日は白山の法会に参列、10日は府南社で大般若経を読み、15日は国分寺の法会に参席しました。

この日から3日間、管内9神社を参拝し、自身の土着や検田を申し伝えていきます。18日は国印を入れた箱の鍵を倉に納め、19日に淡津泊に着き、勅旨田の沙汰を行いながら、20日には都へと戻っていきましました。短期間のうちに精力的に公務をこなす姿がわかります。



『為房卿記』寛治5年(1091)7月1日から21日の条(国立公文書館内閣文庫蔵)



結構大変
なんじゃ

都から伝わる平安文化

続々と派遣される国司を通して、加賀国府には都の息吹とともに平安文化が伝来してきました。

例えば、山林寺院の浄水寺跡(小松市八幡)からは、都から運ばれた珍しい中国産水注が見つかっています。また、漆町C遺

跡からは呪いの木簡が出土するなど信仰にかかわる文化も持ち込まれました。

このように、政治だけでなく文化でも加賀国の中心地となつた加賀国府とその周辺は大いに発展し、梯川の中流域には多くの集落が営まれました。



浄水寺跡から出土した中国産水注
(石川県埋蔵文化財センター提供)



漆町C遺跡出土の呪符木簡

地理的にも最適な条件を備えていた

国府があった古府台地は、2つの河川の合流地点に位置するとともに、古代集落遺跡を見下ろす高台にありました。梯川河口の安宅から東へ7.5kmの地点にあり、交通の要衝でもありました。

国府立地地形

交通の利便性は
必須条件！



開発容易な広い土地

国府を構成する主要施設は、平野の集落を見下ろす高台に配置されていたと考えられます。まだ、国府などの施設の発見には至っていませんが、古府台地内は多くの施設が営まれ、多くの役人などが生活するような広く住みやすい場所だったのでしょう。

水害に強い台地

加賀国府があったと推定される古府台地は、梯川とその支流である鍋谷川に挟まれた高台になっています。梯川は古くから何度も洪水を繰り返してきた暴れ川で、水害が及ばない高台であることは国府立地の必須条件だったはずす。

梯川で安宅に直結

古くからの港と考えられる安宅には、海沿いを走る北陸道の中継拠点である駅が置かれ、国府とは梯川の水運で直に結ばれていました。8世紀代に存在していた淡津（現粟津）駅は、木場潟の南に置かれていた可能性があり、加賀三湖水路の結節点だったと考えられます。

加賀立国前史をひもとく

小松市域で見つかった多くの遺跡から、国府誕生までの変遷をたどってみましょう。

弥生時代の拠点集落

「八日市地方遺跡」はJR小松駅の東側に形成された弥生時代中期の拠点的な大規模環濠集落跡です。舟運の拠点となるなど交通の要衝でもあったこの集落では、稲作のほか、木製品や管玉・勾玉の生産も盛んで、西日本一帯にまで流通していたとみられます。



八日市地方遺跡出土品

新興勢力が台頭

古墳時代後期、南加賀で強い勢力を持っていたのはヤマト王権とながっていた江沼臣でした。大玉律令制定後、南加賀は江沼郡と称され、江沼臣が郡司の長官として基盤を維持していたものの、財部氏や膳氏などの新興勢力が台頭してきました。精巧な切石横穴式石室が見つかった河田山古墳（小松市国府台）は、そうした様相を示しています。



河田山12号墳全景

北陸有数の製陶・製鉄産業

小松市南部の丘陵地では古墳時代後期から、朝鮮半島から伝わった技術である須恵器生産や、飛鳥時代には製鉄や鉄製品の生産が大規模に行われていました。須恵器の窯跡は200基以上、古代製鉄遺跡も約60カ所見つかっています。加賀立国後は、国分寺などで甞かれたであろう瓦や、役所で使われた硯なども焼かれています。



戸津窯跡群全景

財部氏の成長

8世紀前半～9世紀末の建物で構成される「佐々木遺跡」（小松市佐々木町）から、「野身郷」「財部寺」と墨で書かれた須恵器が出土しました。野身郷は能美郡5郷の一つであり、財部は能美地域を勢力基盤とする在地氏族・財部氏と考えられます。財部氏の館もしくは公的施設跡と推測される佐々木遺跡は、財部氏が律令国家でも力を保っていたことを示しています。



佐々木遺跡出土財部寺墨書土器

国府にふさわしい
風土と立地

現小松の地が
なぜ
選ばれた？

加賀国から始まった大事件

中央政界をゆるがした

安元事件

国府VS中宮八院のバトル

白山信仰が盛んとなった平安時代、白山本宮と白山中宮は勢力を競い合っていました。白山中宮は能美・江沼郡に宗勢を伸ばし、中宮末寺となった加

賀国府近在の8カ寺は中宮八院と呼ばれていました。
時の加賀国守・藤原師高の目代（代官）として加賀国に赴任した藤原師経（師高の弟が、平安末期の安元2年（1176）、中宮八院の一つ涌泉寺の立ち入り検査に踏み切ったところ、寺僧たちが反発したため、師経は涌泉寺を焼き打ちしました。



この暴挙に怒った白山中宮勢は師高・師経の断罪を求めて、比叡山延暦寺に大挙して上洛し、比叡山が後白河法皇に強訴した結果、師高・師経兄弟は処罰されました。この騒動を「安元事件」と呼びます。

清盛VS後白河法皇も激化
師高・師経は後白河法皇の側近だった西光の子です。後白河法皇と対立関係にあった平清盛は、後白河法皇の「延暦寺討伐」の命に反発し、安元3年（1177）、「平家打倒の密議」を口実に西光を含む後白河法皇の側近たちを失脚させました。俗に鹿ヶ谷事件と呼ばれます。この事件を契機に対立が激化、清盛は治承3年（1179）に、後白河法皇を幽閉し、名実ともに平氏政権となるのです。
つまり、安元事件が中央政界を揺るがしたことをきっかけに清盛の独裁化が加速し、ひいては源平合戦にもつながっていったというわけです。



「平家物語絵巻」巻第一下「鶴川合戦の事」(部分)鶴川涌泉寺に乱入する師経一行 (財林原美術館蔵)

仏御前

清盛に愛された白拍子

平安時代末期、加賀国仏ヶ原（現小松市原町）に生まれた仏御前は、14歳で京に上り白拍子になります。時の権力者・平清盛は祇王という白拍子を寵愛していましたが、心が仏御前に移ったため、祇王は仏門に入りました。

清盛の無慈悲な行為に世の無常を感じた仏御前も出家して、祇王を訪ね、共に仏門に励みました。その後、仏御前は帰郷し、治承4年（1180）、若くしてこの世を去ったと地元では伝わります。原町には仏御前にまつわる伝説や、仏御前屋敷跡、仏御前墓などの史跡が残っています。



祇王寺より贈られた仏御前坐像

安宅合戦

源平が激闘繰り広げる

治承4年（1180）、源頼朝と木曾義仲が挙兵しました。呼応した北陸在住の武士も挙兵し、加賀の地で平氏軍と激闘を繰り広げました。一度は加賀を制圧された義仲らの源氏軍は、越中、加賀の国境で平氏軍を撃破し、安宅の合戦にも勝利。敗れた平氏軍は篠原（現加賀市篠原町）に退き、ここでも死闘の末、あえなく敗走しました。

最後まで孤軍奮闘した平氏軍の斎藤別当実盛も討ち死にしました。義仲がその首を池で洗わせたところ、黒髪が白髪に変わり、幼少期に命を助けられた実盛であることに気づきます。かつての恩人を討つたことに涙した義仲は、実盛の兜などを多太神社（小松市上本折町）に奉納したと伝わりま



斎藤実盛の兜(小松市の多太神社所蔵)

国の重要文化財に指定されています。



弁慶・義経・富樫の銅像

安宅の関

名作「勧進帳」の舞台

能「安宅」や歌舞伎「勧進帳」の舞台となったのが安宅の関（小松市安宅町）です。源頼朝に追われ、山伏姿で奥州に落ち延びる源義経主従一行が関守の富樫に怪しまれ、勧進帳としてありあわせの巻き物を読み上げるなどの弁慶の機転で通行を許されるというストーリーです。関を抜けて休んでいるところに富樫が現れ、非礼を詫言いて酒を酌み交わす場面も見所です。

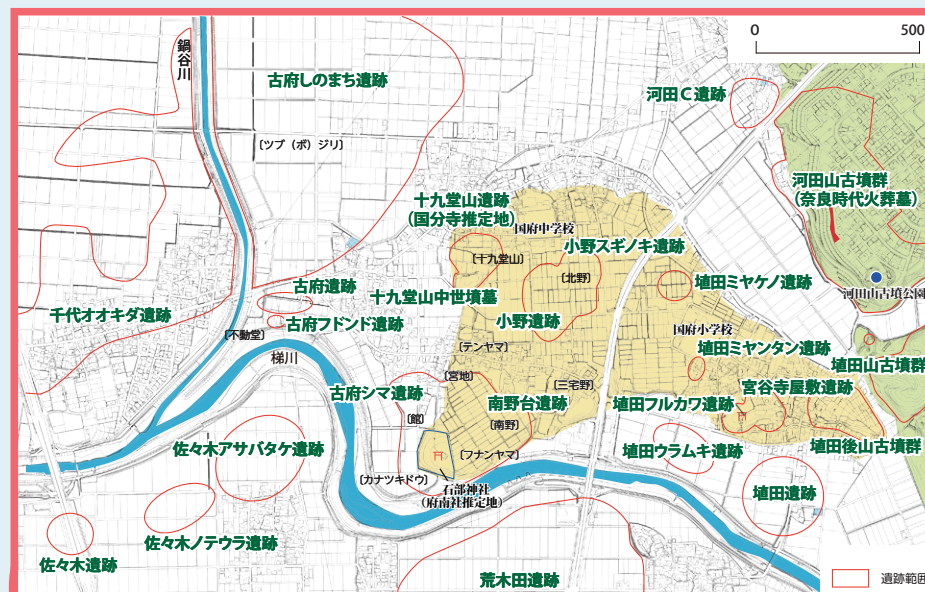
石川県指定史跡「安宅関跡」には弁慶・義経・富樫の銅像や「勧進帳ものがたり館」など見学施設が充実しています。

古代遺跡調査が語る歴史

加賀国府めぐる

新事実が続々

古府台地を含む梯川中流域には多くの古代遺跡があります。古府台地では古府シマ遺跡、南野台遺跡、十九堂山遺跡などの国府関連遺跡のほか、小野遺跡などの集落遺跡が見つかっていますが、多くは過去の耕地整理などによって造成され、詳細は分かっています。



古府台地およびその周辺の古代遺跡分布

国分寺と山林寺院

国府推定地に近い丘陵部には松谷廃寺跡、宮竹うつし山A遺跡、八里向山B遺跡、里川E遺跡など多くの古代山林寺院が点在しています。里の集落から隠れた山間地に短い期間、主



八里向山B遺跡出土の奈良三彩

一方、浄水寺跡では9世紀後半以降、長期にわたり複数の房舎が営まれ、有力者の支援を受けた寺院であったと考えられます。「吉」など縁起の良い語句を書いた墨書土器が大量に見つかっており、加賀国府に集う有力者の要請により雨乞いなど様々な儀式を盛んに行っていたと考えられます。

国司巡検に向け総社を再整備？

南野台遺跡周辺は「フナヤマ」と呼ばれ、遺跡内の石部神社は加賀国総社・府南社に該当すると推測されています。平成30～令和2年度の調査で、11世紀後半～12世紀前半の小礫が敷き詰められた礫敷遺構が確認されました。加賀守・藤原為房が府南社を訪れた時期に相当し、国司巡検に伴う大規模な再整備や祭祀にかかわるものと想定されます。

石部神社西側の古府シマ遺跡の調査でも、11～12世紀の掘立柱建物や井戸が確認され、地域に残る「タチ」の地名から「国司館」が存在していた可能性も指摘されています。



南野台遺跡の礫敷遺構



平安時代末頃の加賀国府に関連した施設があった可能性が指摘されてきた古府シマ遺跡の古代末期遺構
(石川県埋蔵文化財センター提供)

内陸で発見された古代北陸道

10世紀前半に完成した法令集「延喜式」によると、日本海に面する安宅や比奈などに駅家があったことから、南加賀における古代北陸道は海沿いを通っていたと考えられています。平成29年に行われた大領遺跡(小松市大領町・今江町)の発掘調査で、8世紀末～9世紀初頭の幅約8mの官道クラスの道路跡が見つかりました。現場は木場潟の北側約500m、海岸線から約5kmの内陸部です。



大領遺跡で見つかった幅約8mの古代の道路遺構。北東方向へ延長させると加賀国府や国分寺推定地周辺に至る
(石川県埋蔵文化財センター提供)

実はその前年、平成 京跡出土木簡に記された「江沼郡潮津駅」が「江沼郡淡津駅」に訂正され、現在の木場潟南方の栗津町付近に駅家があった可能性が高まっていました。しかも、道路跡を北東方向にまっすぐ延長した先は加賀国府推定地近辺です。

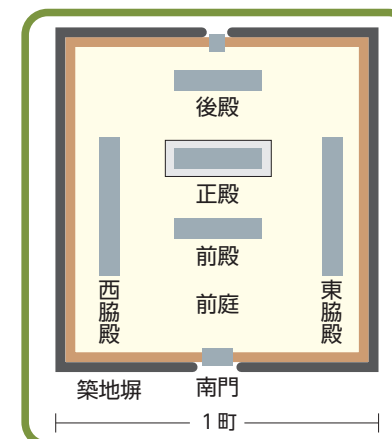
こうしたことから、奈良時代前半頃の古代北陸道は内陸部を通っており、のちに海浜ルートに変更された可能性も出てきました。

小高い丘に
国府の中心施設

古府台地を中心に国庁・国衙・国分寺



出雲国府の復元模型(島根県立八雲立つ風土記の丘所蔵)



国庁模式図

建物の配置や構造は
都の宮殿を模してる！



地域のシンボリック
都市景観

律令国家が地方支配を行うにあたり、地方に置かれた国府は重要な役割を担いました。

中心施設として儀式や饗宴、政務などを行う国庁こくちやうや行政事務などを行う役所群があり、特に、国庁は、都の宮殿にある大極殿・朝堂院と同じ配置をしており、全国の国府でほぼ同じ形で整備された律令国家

えられていましたが、地形などの制約もあり、必ずしもそうではなかったようです。加賀国府も古府台地を中心に国庁・国衙・国分寺・府南社などの施設が建てられていたと考えられます。

中心となる建物群は、平野部の集落から瓦屋根の重厚な建物群を仰ぎ見る、地域のシンボルの都市景観を形成していたと思われます。

国府の施設と役割

国 庁：政務・儀式・饗宴
曹 司：行政実務
国司館：国司官舎
 (のち政務・儀式・饗宴も)
国分寺：国家祭祀・寺院統括
総 社：国司参拝・祭祀
その他：倉庫・厨・国学・宿舎・
 雑舎・工房等



府南社(総社)だったとされる石部神社

加賀郡からの移転説も

立国当初の加賀国府は加賀郡の現金沢市付近にあり、10世紀になって能美郡に移転したという説があります。その根拠は「わ みょうるいじゅうしやう和名類聚抄だいとう」の大東急きゅう記念文庫本の加賀郡下注に「国府」と書かれている」「加賀国なら加賀郡に国府を置くのが自然」「金沢の遺跡調査で国府の存在をうかがわせる遺物が出土した」などです。しかし、「和名類聚抄」の流布本では、加賀国郡の記事冒頭に「国府は能美郡」と明記されており、加賀国府遺跡が未確認の現在、論争に決着がついていません。

立国から18年後にできた国分寺

国分寺は天平13年(741)、鎮護国家を目
指す聖武天皇によって発願され、諸国への設
置が定められました。

加賀国の場合、立国から18年後の承和8年（841）、勝興寺しょうきうじを転用して整備され、僧10人を越前国から分けることで成立しました。平安時代には定額寺じやうがくじと呼ばれた官寺に準ずる私寺を国分寺とする事例が多く、現七尾市にあつた能登国分寺も大興寺だいこうじが転用されました。

加賀国府推定地南方の丘陵には北陸最大規模の須恵器(古代陶器)生産地だった南加賀

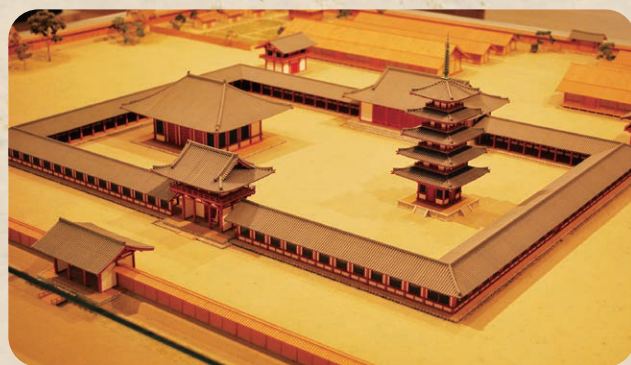
窯跡群があり、瓦や須恵器などが焼かれ、国府や国分寺に供給されたようです。支群の戸津窯跡からは仏塔の頂部を飾る陶製相輪そうりんや軒先瓦が出土しています。

国分寺は十九堂山遺跡付近にあったと考えられていますが。ここで出土した白鳳期の平瓦は、近くの立明寺窯で生産されたもので、前身の勝興寺の瓦だったかもしれません。

同じ転用国分寺である能登国分寺は発掘調査により2町四方の寺域に南大門・中門・金堂・塔・講堂・築地塀などが配置されていたことが判明しています。



戸津窯跡群出土幹先瓦



能登国分寺の復元模型(七尾市提供)

はねだ むしづか 埴田の虫塚 (埴田町)

市指定文化財

てんぼう
天保10(1839)年に稲の害虫であるウンカが大発生し、駆除して埋めた地に建てられた虫塚です。碑文には駆除法も記されています。



じゅく どうやま 十九堂山遺跡 (古府町)

古代瓦が採集される場所として古くから知られ、加賀国分寺の推定地と言われています。現在は墓地となり、敷地内には中世石塔群があります。



市指定文化財

前田利常公灰塚 (河田町)

小松城に隠居した加賀藩主の前田利常公が万治元(1658)年に66歳で亡くなり、茶毘に付された(火葬された)場所です。遺命によってこの地が選ばれたとされますが、茶の湯を愛した利常公のために、茶の産地を選んだとの伝承も。周りに堀をめぐらせて区画し、堀の内側に土塁を設けて塚を築いたことが分かっています。

桜生水 (河田町)

平成の名水百選

不老長寿伝説のある霊峰白山の伏流水。小公園として整備されており、春には桜が美しく咲き誇ります。



加賀国府ものがたり館・古墳公園

市指定文化財

河田山古墳群の発掘調査成果を公開していた「河田山古墳群史跡資料館」は、加賀国府の歴史を楽しく学び発信する「加賀国府ものがたり館」としてリニューアルしました。また、施設に隣接する河田山古墳公園には、新たに国府推定地を一望できる展望デッキがつくられ、市指定史跡である保存された3基の古墳とともに楽しむことができます。

小松市国府台3-64 電話●0761-47-4533 開館時間●9:30~16:30
休館日●水曜日(祝日の場合は翌日) ほか

加賀国府の歴史を
楽しく学ぼう!



佐々木遺跡出土「野身郷」墨書土器



公園に保存された古墳(写真は12号墳)

小松市埋蔵文化財センター

小松市原町ト77-8 電話●0761-47-5713 開館時間●9:00~17:00 休館日●水曜日(祝日の場合は翌日) ほか

小松市内の遺跡や遺跡からの出土品の調査に携わる小松市埋蔵文化財センターは、埋蔵文化財を身近に感じてもらえるよう、出土品の展示とともに、古代もののづくり体験や出土品の整理作業体験・見学などを実施しています。また、センターには国重要文化財出土品が保管されています。詳しくはホームページをご覧ください。



重要文化財

八日市地方遺跡出土品



重要文化財

矢田野エジリ古墳出土埴輪



小松市埋蔵文化財センターHP

加賀国総社(府南社)推定地になっている古府町の石部神社隣接地に、梯川と白山眺望、国府推定地の風景を望みながら神社境内へと散策可能な公園です。

石部神社境内や古府シマ遺跡の発掘調査からは、平安時代の貴重な発見があります。1091年に加賀国守・藤原為房が下向した折りに



訪れたであろう府南社から望む白山や梯川対岸にひろがる穀倉地帯、北には河田山古墳群と、当時の情景に想いを馳せることができます。

ふなんやま
府南山歴史公園

もっと知りたい、
楽しみたい

加賀国府周辺
イチオシ
立ち寄りスポット

